鼓膜損傷ノ鑑定二例

K. Tanoue: 2 Fälle von Begutachtung der Trommelfellverletzung.

熊本醫科大學耳鼻咽喉科教室

田 上 一 忠

余ハ數年前打撲ニ因ル鼓膜損傷ノ訴訟事件ニ就キ當局ヨリノ依頼ヲ受ケ、親シク病症ヲ診察シ、嚴密ナル検査ノ下ニ鑑定書ヲ作製セリ。
本例ノ本邦文献ニ少ナキヲ信ジ此所ニ報告シテ斯學研究ノ一資料ニ供セント欲ス。

第一例 鑑 定 書

大正九年十一月〇日午前九時熊本地方裁判所刑事部法廷ニ於テ刑事某氏ヨリ左ノ鑑定ヲ囑托セラル。

鑑 定 事 項

熊本縣〇〇〇郡〇〇村大字〇〇〇〇〇番地

職 業 〇 業

吉 〇 彦 〇 〇 (四十一年)

右吉〇彦〇〇ハ大正九年〇月〇日〇〇賣買約束ノ相違ニヨリ口論ノ結果、松〇壽〇ヨリ左側耳部ヲ毆打セラレ難聴ヲ來セリト云フ。

一、吉〇彦〇〇ノ左耳鼓膜ハ破レ居ルヤ否ヤ。

二、若シ破レ居レリトセバ其原因如何。

三、其鼓膜ノ裂傷ハ本年〇月〇日以前ナリヤ、其際起リシモノナリヤ。

四、其鼓膜裂傷ニ依ル聽力及ビ治療ニ對スル結果如何。

依ツテ余ハ本鑑定ヲナスニ當リ參考トナル可キ〇〇醫師ノ診斷書及ビ本件ニ關スル一際ノ調書ヲ親シク閱覽シ、且ツ吉〇彦〇〇ヲ診査ノ精確ヲ期スル爲メ、大正九年〇月〇日及ビ〇日ノ〇回縣立熊本病院耳鼻咽喉科診察室ニ出頭セシメ詳細ニ聽器ヲ検査セルニ其結果左ノ如シ。

既 往 症

父ハ腦充血ニテ明治〇十〇年頃死亡ス、母ハ健康ニテ尙生存ス。同胞六人内一名赤痢ニテ死亡スト云フ、遺傳的ニ耳疾患ナシト云フ。

本人ハ小學時代ヨリ喘息ニ悩ミ、毎年一乃至二回ノ發作アリシモ、現在ニ至ル迄増悪スル傾行ナシ、其他癩疾、微毒等ニ罹リシ事ナク、耳ハ健康ニシテ聴力ニ障礙ナカリキト云フ。平常ノ嗜好トシテ煙草、酒ヲ中等量ニ用フ。(以上ハ本人ノ陳述セル既往症ノ大要ナリ)

現 症

骨格筋肉ノ發育中等度、胸腹部臓器ニ何等病的異狀ヲ認メズ、鼻中隔ハ右側ニ彎曲シ、左側下甲介稍々肥大セリ。咽頭後壁ハ僅少ノ淋色濾胞ノ肥大ヲ見、口蓋扁桃腺、咽頭扁桃腺ノ肥大ヲ認メズ。

左耳毆打ニ關スル既往症

去ル大正九年〇月〇日吉〇彦〇〇ハ松〇壽〇ト〇〇賣買約束ノ相違ヨリ口論ヲナシ、松〇壽〇ヨリ頭部及ビ全身ヲ毆打セラレタリ。其際松〇壽〇ノ手掌ハ正シク吉〇彦〇〇ノ左耳部ニアタリ、右耳モ亦毆打セララル。其際多少嘔吐ノ氣味アリシノミニテ、左耳ニ雜音等ヲ感ゼズ、眩暈歩行障礙等ハナカリキ。其後左耳ニ疼痛ヲ感ジ、同側耳翼ノ腫脹、出血、頬部腫脹、頭痛ヲ訴ヘ、從來聴力ニ異狀ヲ感ゼザリシニ、此時初メテ難聴アルニ氣付キ、右側耳即チ健康耳ヲ塞ギ、左耳即チ毆打セラレタル方ノ耳ノミヲ以テ聞ク時ハ、言語ヲ一ツノ雜音トシテ聞キ得ルニ過ギザリキ。依ツテ同日々刻〇〇醫師ノ下ニ至リ診療ヲ受ケ、耳翼部附近ノ創傷ノ治療、耳内検査ヲ受ケシニ、鼓膜ニ裂傷アリト云ハレ、同時ニ診斷書ヲ受ケタリ。但シ耳内ニハ何等ノ處置ヲモ受ケズト云フ。

其後左側耳ノ難聴ノ度ハ依然トシテ持續シ、輕快又ハ増悪スル事ナク目下ノ狀態ニ至リ、他ニ何等ノ症狀ヲ殘サズ。但シ〇月〇日即チ受創後〇日以後一回〇〇醫師ヨリ鼓膜ノ再検査ヲ受ケシニ裂傷ハ受創當時ヨリ餘程少サクナリ居レリト云ハル。(以上本人ノ陳述ニ依ル)

此所ニ參考トシテ受創當日〇〇醫師ノ認メシ診斷書中ヨリ耳ニ關スル狀態ヲ摘録スレバ次ノ如シ。

打撲性創傷。一、左耳翼表皮剝脫大部分ニ及ブ。二、左耳鼓膜被害ヲ受ケ歐氏管ヨリ空氣通ズ。

右創傷ハ暴力ニ因リ倒サレ地面上ニ於テ生ジ、又ハ鈍器ニ由リ打撲セシ場合ニ生ゼシ打撲創ニシテ……………打撲性創傷左耳翼表皮剝脫ノモノハ〇日間ヲ要シ、左耳鼓膜破損ノモノハ不治ニ屬スル聴覺障礙アリ。

左耳ノ現症 大正九年〇月〇日診査(左耳毆打セラレタル日ヨリ〇〇日間ヲ經過ス)

余ハ毎常耳ノ検査ニ使用スル一定ノ法式ニ從ヒ順次診査セシニ所見次ノ如シ。

左耳翼及ビ其附近ノ皮膚ニ視診上異狀ナシ。外聽道内尋常、損傷ヲ受ケタルガ如キ狀態ヲ認メズ、但シ鼓膜附着部ノ下壁ニ於テ一見長時日ヲ經過セル血塊ノ如キ觀ヲ呈スル黒赤色ノ異物附着シ居レリ。左側鼓膜ハ一般ニ稍々陷凹シ、中央部ハ透明ナルモ外聽道ニ附着スル周邊

部ハ稍、潤濁肥厚シ光錐ヲ缺除セリ。鼓膜ノ前下部ニ於テ其外聽道ニ附着セントスル周邊部ニ一ツノ新ラシキ癰痕ヲ認メ外聽道下壁ニ附着シ居リシト略、同様に黒赤色ノ異物附着シ居レリ、該癰痕ハ大サ約粟粒大ニシテ表面恰カモ上皮形成トモ見ル可キ觀ヲ呈セリ、依ツテ余ハ耳聾(俗ニ云フ耳^{フカ}注)ノ鼓膜面ニ附着シ居ルニ非ザルヤヲ疑ヒ、捲綿子ヲ以テ是ヲ除去セントセシニ除去スル事能ハズ。尙又此部ニ於テ鼓膜ニ穿孔アルニ非ザルカラ疑ヒ、歐氏普通氣法ヲ行ヒタルモ空氣ヲ通ズル事能ハズシテ全く鼓膜ニ穿孔ナキ事ノ證明ヲ得タリ。

後方

下方

聽力検査

右耳ニ於テハ耳翼及ビ其附近皮膚ニ何等ノ異狀ヲ認メズ。外聽道尋常、鼓膜ハ一般ニ稍、陷凹シ、中央部透明ナルモ周邊部ハ稍、潤濁シ、光錐ヲ缺ク。

本検査ヲナスニ當リ余ハ被検査者ヲ布片ヲ以テ兩眼ヲ固ク被ヒ、而シテ外界ヨリ來ル雜音ヲ避ケル爲メ密閉セル一空ヲ撰ビ凡テノ検査ヲ行ヒタリ。

一、言語ヲ以テ検査スル方法

前方 新ラシキ癰痕

リ高聲音、普通談話音及ビ呬語ヲ以テ一定ノ言葉(例之東京、四十七、長崎等)ヲ發シ、若シ被検査者之ヲ聽取スル時ハコレヲ反復セシメ以テ聽力ノ程度ヲ知ル方法ナリ。

一、兩側耳ヲ開放セル場合即チ何等ノ處置ヲ施サザル場合

(イ) 高聲音、普通談話音及ビ呬語ヲ以テ検査スルニ共ニ二間半ノ距離ニ於テ何等ノ障碍ナク、ヨク聽取スル事ヲ得タリ。

二、脫脂綿ヲ水ニ浸シ是ヲ以テ右側外聽道ヲ全く閉塞シ左耳即チ毆打セラレタル耳ヲ検査セル場合

(イ) 高聲音ヲ以テ検査セル場合

一、間ノ距離ニ於テ聽取スル事ヲ得タリ。

(ロ) 談話音ヲ以テ検査セル場合

二、間半ノ距離ニ於テ單ニ「音」トシテ言語ヲ聽取スルノミ、一米突ノ距離ニ於テハ言語ヲ聽取スル事ヲ得タリ。

(ハ) 呬語ヲ以テ検査セル場合

一米突半ニシテ呬語ヲ單ニ「音」トシテ聴取スル事ヲ得、左耳前約一尺ノ距離ニ於テ言語トシテ聴取スル事ヲ得タリ。

三、右耳即チ健康耳ノミヲ以テ檢セル場合

(1) 高聲音、普通談話語及ビ呬語ヲ以テ檢セル場合共ニ二間半ノ距離ニ於テ何等ノ障礙ナクシテヨク聴取スル事ヲ得タリ。

左耳一般検査法

C 音又検査
Fis 音又検査
骨傳道検査
リンネ氏試験
ウエーベル氏試験

強ク短縮ス
強ク短縮ス
強ク短縮ス
陰性
偏

右耳一般検査法

C 音又検査
Fis 音又検査
骨傳導検査
リンネ氏試験
ウエーベル氏試験

略尋常
僅カニ短縮ス
尋常
陽性
右側ニ偏ス

音又試験

一定ノ高調音或ハ低調音ヲ發スル器械即チ「音又」ヲ用ヒテ本人ノ聽力ノ程度ヲ檢スル方法ニシテ此成績ハ聽力尋常ナル者(此場合余ノ耳ヲ尋常ナルモノトシテ使用セリ)ニ比較シタル數字ナリ。即チ健耳ノ聽力ヲ百ト假定シ被検査ノ聽力ヲ「パーセント」ヲ以テ示セリ。

前庭器試験

内耳ノ健不健ヲ知ラン爲メ余ハ前庭器及ビ三半規管ノ官能検査ヲナセリ、本試験ハ通常眼球運動及ビ身體平衡作用ノ障礙ノ存否如何ヲ檢スルニアリ。

第一、偶發性眼球震盪

内耳ニ障礙アル場合ハ自覺的ニ步行蹣跚、眩暈惡心、嘔吐アル場合多シ。又他覺的ニハ眼球ヲ檢

左耳ノ聽力検査
力 聽 ノ 耳 左
查 檢 日 ○ 月 ○ 年 ○ 正 大

右耳ノ聽力検査
力 聽 ノ 耳 右
查 檢 日 ○ 月 ○ 年 ○ 正 大

左耳ノ聽力検査
力 聽 ノ 耳 左
查 檢 日 ○ 月 ○ 年 ○ 正 大

右耳ノ聽力検査
力 聽 ノ 耳 右
查 檢 日 ○ 月 ○ 年 ○ 正 大

シテ一定ノ方向ニ震盪スルヲ認ム。然ルニ本人ニ就キテ檢スルニ一ツモカ、ル症狀ナシ。

第二、實驗的眼球震盪

前庭三半規管ハ人工的ニ一定ノ刺激ヲ與フル時ハ反射的ニ眼球震盪ナル症狀ヲ發スルモノニシテ、若シ之等ニ障礙アル場合ハ該症狀ハ全ク起ラザルカ或ハ異狀ヲ呈ス。

一、温度の刺激

體温(三十六度乃至三十七度)ト一定ノ差アル温度ノ水ヲ以テ耳洗ヲ行ヒ、鼓膜ノ方向ヨリ一定ノ刺激ヲ與フル方法ニシテ、此際健康者ニアリテハ眼球震盪ヲ起シ自覺的ニ眩暈、嘔吐、嘔心、身體失調等アリ。

今水温十六度即チ體温トノ差約二十度ノ冷水ニテ洗耳ヲ行ヒテ檢スルニ次ノ如シ。

灌 耳 側		水 温		眼 球 震 盪		副 症 狀
左	右	左	右	發現時	持續時	
耳	耳	十六度	十六度	約一分	約一分四十五秒	眩暈感
右	左	十六度	十六度	約一分	一分五十秒	眩暈感
					右方水平ニ起ル	
					左方水平ニ起ル	

二、廻轉性刺激

被檢者ヲ廻轉自由ナル一定ノ椅子ニ座セシメ之ヲ一定ノ速度ニ持續的ニ廻轉セシメ、而シテ直チニ廻轉ヲ止メ眼球震盪ヲ檢スル方法ニシテ、自覺的ニハ眩暈、惡心、身體失調等ヲ訴フル者ナリ。余ノ被檢者ニ就キ實驗セル成績次ノ如シ。

廻 轉 方 向		眼 球 震 盪		副 症 狀
左	右	有 無	持續時	
廻	廻	有	九秒	眩暈アリ
シ	シ	有	八秒	眩暈アリ
			左方	
			右方	
			水平	

第三、「ゴニオメーテル」試驗

身體平衡作用ノ障礙ノ程度ヲ數字のニ示ス方法ナリ。之レニヨリテ檢查セシ成績次ノ如シ。

開 眼 時				閉 眼 時			
足	尖	降	下	足	尖	降	下
右	足	降	下	右	足	降	下
二	五	度		二	〇	度	
足	尖	舉	上	足	尖	舉	上
二	四	度		二	一	度	
左	足	降	下	左	足	降	下
二	五	度		二	一	度	

左耳即チ毆打セラレシ耳ノ處置

左耳ニ對シ歐氏普通氣法ヲ施シタルモ聽力可良トナラザルガ如シ。但シ通氣度殆ンド尋常ナリ。

考 案

以上検査セル成績ヲ綜合シ考案スルニ、大正九年〇月〇日余ガ吉〇彦〇〇ノ左耳鼓膜ヲ診スルニ其前下部ニ於テツノ小ナル癰痕存在スルヲ認メタル外他ニ穿孔等ノ著明ナル變化ナカリキ。之當時余ハ歐氏普通氣法ヲ行ヒテ檢セルニ鼓膜ヲ通ジテ空氣ノ外聽道ノ方ニ來ラザルニヨリテ穿孔ノナキコト明白ナリ。然ルニ該癰痕ハ決シテ生理的ニ存在スルモノナラズ、必ズヤ何等カノ原因ニヨリテ發生セラレザル可カラズ。

凡ソ病的タルト非病的タルトヲ問ハズ鼓膜ニ一定ノ穿孔存在シ之レガ治癒スル際ニハ必ず癰痕ヲ形成スルモノナリ。而シテ其癰痕形成ノ原因ヲ知ラント欲セバ其癰痕ニ由ツテ起ル穿孔ノ原因ヲ知ラザル可カラズ。凡ソ鼓膜穿孔ハ病的及ビ非病的即チ外傷ニヨリテ起リ得ルモノナリ。

病の原因トシテハ化膿性中耳炎ノ際ニ常ニ吾人ノ實驗スルガ如ク鼓膜ニ穿孔ヲ有ス。

非病的原因トシテハ即チ外傷ニヨリテ鼓膜ニ穿孔ヲ起シ得ルモノナリ。即チ其外傷ガ直達的(例之「耳カキ」ノ如キモノニテ直接鼓膜ヲ破リタル場合)或ハ介達的(例之「外耳ヲ毆打シ間接ニ鼓膜ヲ破リタル場合ノ如キ)外傷ニカ、ワラズ起シ得ルモノナリ。

是等病的及ビ非病的原因ニヨリテ起サレタル鼓膜穿孔ハ各々其特徴ノ所見ヲ有スルガ故ニ其新鮮ナル時期即チ外傷ヲ受ケシ直後或ハ短時間ノ間ニ於テハ明カニ認メ得可キモノナルモ決シテ永久ニカ、ル狀態ヲ殘存スルモノニ非ズ、時日ノ經過ト共ニ特徴點ハ漸時消失スルモノナリ、尙兩者共治癒ノ經過ヲ取ル場合ハ鼓膜ノ再生現象トシテ穿孔縁ヨリ上皮形成ヲ營ミ穿孔ハ閉塞セラレ遂ニ全ク穿孔ト全然異ナル癰痕ヲ以テ治癒スルモノナリ。故ニカ、ル狀態ニ於ケル癰痕ヲ診査シ而シテ其以前ニ存在セシ穿孔ガ病的穿孔ナリヤ或ハ非病的の穿孔ナリヤヲ判

斷スル事ハ絶對的ニ不可能ノ事ニ屬ス。從ツテ其穿孔ヲ起セシ原因ノ如キハ勿論不明ナリト云ハザル可カラズ。

翻ツテ吉〇彦〇〇ガ現在ニ於ケル左耳鼓膜ニ就イテ考フルニ、前述セルガ如キ一ツノ小ナル癰痕ヲ殘存スルノミナルヲ以テ以前ニ於テ確カニ癰痕部ニ該當シ一ツノ穿孔ノ存在セル事ハ事實ナリト斷定スル事ヲ得レドモ、該穿孔ハ如何ナル機轉ニ由リテ發生セシモノナルヤ、即チ其以前ニ於テ病的穿孔存在シ之レガ治癒ノ經過ヲ取リタルモノナルヤ或ハ外傷ニヨリテ起リシモノガ癰痕形成ヲ營ミシモノナルヤヲ斷言スル事能ハザルハ論ヲ俟タズ。然レドモ外傷ヲ受ケシ當時診査セシ〇〇醫師ノ言ニ依レバ、以前ハ左耳ニ聽力障礙ナカリシ事、余ノ診査セシ當時吉〇彦〇〇ノ左耳ニ癰痕形成ノ外他ニ中耳炎ノ症狀ヲ認メザリシ事、及ビ外傷性穿孔ニ往々見ラル可キ鼓膜癰痕部、外聽道深部等ニ於ケル凝血塊ト思ハル、モノ附着シ居リシ如キハ是レヲ病的穿孔ノ存在セシモノト見做スヨリ却ツテ該穿孔ハ外傷ニヨリテ發生セシモノナラント想像スルヲ至當ナリト信ズ。

癰痕形成ノ時日ノ鑑定ハ不可能ナルモ癰痕ノ新鮮ナル事、僅少乍ラ凝血塊ノ如キモノ、癰痕部ニ附着セル狀態及ビ余ガ日常ノ經驗ニ依リテ恐ラク四乃至六週以前ニ起リシモノナラント想像セラル。

余ガ調査成績ニヨレバ吉〇彦〇〇ノ左耳ニ神經性難聽アリ、凡ソ神經性難聽ハ一般ニ治癒甚ダ困難ナルモノニシテ却ツテ増惡スルノ傾向アリ。而シテ其經過多クノ場合極メテ徐々ナルモノナリ。故ニ本症ガ可良ノ轉歸ヲ取リテ治癒スルモ極メテ長キ時日ヲ要シ而シテ全ク尋常ナルモノトナル事ハ望ム可カラズ。

以上ノ考案ニ依リテ鑑定スル事次ノ如シ。

一、吉〇彦〇〇ノ左耳鼓膜ハ余ノ檢査セル當時ハ破レ居ラズ。但シ以前ニ於テ破レタルモノガ一定ノ時日ヲ經過シ殆ンド治癒セルガ如ク信ゼラル、一ツノ新ラシキ小癰痕存在セリ。

二、該癰痕形成ノ原因ハ、鼓膜ニ一ツノ穿孔ノ存在セシモノガ治癒セル際ニ生ゼシモノナリト斷定ス。而シテ其穿孔ハ病的ニ生ゼシモノナルヤ或ハ非病的の即チ外傷ニ原因セルモノナリヤ斷言スル事能ハズト雖モ恐ラク外傷ニ因スルモノナランカト推定ス。

三、該癰痕形成ヲ一定ノ外傷ニ因スルトセバ、其外傷ノ加ハリシ時日ノ鑑定ハ不可能ナルモ恐ラク四乃至六週間以前ニ起リシモノナラント推定ス。

四、目下鼓膜裂傷ハ癰痕形成ヲ以テ治癒シ居レリ。然レドモ聽力ノ回復ニ對スル豫後ハ不良ナラント推定ス。

本鑑定ニ要セシ日數ハ大正〇年〇月〇日ヨリ同〇年〇月〇日ニ至ル〇十〇日間トス。

右 鑑定 候 也

大正〇年〇月〇日

第二例 鑑 定 書

大正八年〇月〇日午前九時熊本地方裁判所判事某氏ヨリ左ノ鑑定ヲ囑托セラル。

鑑 定 事 項

熊本縣〇〇〇郡〇〇村大字〇〇、〇〇番地

農 業

M ○ H ○

年齡〇〇年

右M〇H〇ハ大正八年〇月〇日午前九時頃Y〇K〇〇ヨリ左側耳部ヲ毆打セラレ難聴ヲ發シタリト云フ。

一、M〇H〇ノ左耳鼓膜ニ裂傷ヲ生ジ居ルヤ否ヤ。

二、若シ裂傷ヲ生ジ居ルトセバ其原因如何。

三、其裂傷ハ大正八年〇月〇日以前ノモノナリシヤ將タ其當時若シクハ其以後ニ起リシモノナリヤ。

四、其裂傷ハ治癒ス可キモノナリヤ若シ治癒ストセバ其日數如何。

依ツテ余ハ此ノ鑑定ヲナスニ當リテ參考トナル可キ〇〇醫師ノ診斷書ヲ閱覽シ、且ツ本人ヲ診查ノ都合上大正八年〇月〇日午後及ビ〇月

〇日午後前後二回附屬病院耳鼻咽喉科診察室ニ出頭セシメ直接本人ニ就キ詳細ニ次ノ如ク調査ス。

既 往 症

父母ハ不明ノ疾患ニテ死亡ス、但シ生前ニ於テ耳疾ニ罹リシ事ナシト云フ、同胞四人皆健ナリ、目下耳疾ニ罹リ居ラズ。

本人ハ幼少ノ頃ヨリ多少視力障礙アリシニ三十歳前後ヨリ何等原因ノ認ム可キモノナクシテ漸次視力障礙ヲ來タシ目下ノ狀態トナレリ近時ニ至リテハ辛フジテ晝間勞働ニ堪ヘ得ルト云フ。

本人ハ平常胃腸健康ナラズ、時々之レニ惱サル、事アリ。二十一歳ノ頃麻疹ニ、二十四歳ノ頃微毒ニ罹リタル事アリ、二十五歳ノ頃熱病ニ罹リ其後左右兩耳ニ聽力障礙アリタリ。然レドモ一度モ耳内ヨリ膿汁等ヲ漏シタル事ナシ、大正八年〇月〇日以前迄ハ左耳ニ比較シテ聽力宜シカリシト云フ。本人ハ生來酒煙草ヲ用ヒズ。(以上ハ本人ノ陳述スル既往症ノ大要也)

現 症

骨格筋肉ノ發育中等度、胸部諸臟器ニ異狀ヲ認メズ、腹部ニ於テハ肝臟ノ稍々肥大セル外何等ノ變狀ナシ、視力障礙アルガ爲メカ歩行運動稍々不充分ナリ、鼻腔尋常、咽頭後壁ニ僅少ノ顆粒ヲ發生ス、喉頭ニ病變ナシ。

左耳 毆打ニ因スル既往症

去ル大正八年〇月〇日午前九時頃M〇H〇HY〇K〇〇ト少シク感情ノ相違ヨリ口論ヲナシY〇K〇〇ヨリ頭部ノ各所ヲ毆打セラル、其際Y〇K〇〇ノ打チ右手掌ハ正シクM〇H〇ノ左耳部ニ當リタリ、同時ニ「チュウン」ナル雜音ヲ感じ多少眩暈ノ氣味アリテ倒レタリ、但シ其直後ニ於テ嘔吐、嘔心、歩行障礙ハナカリキ、尙右耳部モ毆打セラレタルモ右耳ハ何等異狀ヲ感ゼザリキ、歸宅後左耳ニ中等度ノ疼痛、左耳翼及頰部ノ腫脹頭痛ヲ感じ「チュウン」ナル耳鳴ハ依然トシテ持續シ左耳ノ聽力一層障礙セラル、ヲ氣付ケリ、依ツテ同日S醫師ヲ訪ヒ診ヲ乞ヒシモ何等ノ處置法ヲ施サレズ、第三日目及ビ第四日目ハ其マ、ニ放置ス。第五日目ニ〇醫師ヲ訪フ、何等ノ處置ヲ施サレズ左耳鼓膜損傷シ多少ノ出血アリト云ハレタリ。

其後左耳ニ於ケル「チュウン」ナル耳鳴、耳痛及頭痛等ハ時日ノ經過ト共ニ全ク消散シ聽力モ漸次輕快シタルモ毆打セラレタル以前ヨリモ餘程聽力障礙アリ目下ニ於テハ只左耳ノ聽力障礙ヲ訴フルノミナリ。(以上本人ノ陳述スル大要ナリ)

左耳ノ現症。大正八年〇月〇日診査(左耳ヲ毆打セラレタル日ヨリ八十二日間經過ス)

左耳翼及ビ其附近ノ皮膚ニ視診上異狀ナシ、左耳外聽道内ニハ少量ノ軟キ耳聾栓塞存在シ其深部鼓膜ニ接スル部分ニ少量ノ汚穢色濃厚ナル膿汁ヲ有ス、依ツテ余ハ鼓膜及ビ外聽道ノ狀態ヲ精細ニ檢セント欲シ過酸化水素液ヲ浸セル耳用捲綿子ヲ以テ膿汁及ビ聾栓塞ヲ悉ク除去セシニ外聽道ニ於テハ其何レノ部分ニ於テモ損傷又ハ出血等ノ痕跡ヲ認ムル事能ハズ。

左側鼓膜ノ臍部ヨリ前上方樞骨柄ノ稍々前方ニ於テ太サ粟粒大ヨリ稍々大ニシテ形卵圓形ヲ呈スル一ツノ穿孔ヲ認ム而シテ該穿孔ヨリハ粘稠ナル膿汁流出セリ穿孔緣ハ一般ニ鈍圓ニシテ圓味ヲ帶ビ不正ナラズ而シテ肥厚アリ然レドモ穿孔部ヨリ肉芽發生等ナシ其他ノ部ハ輕度ノ充血ヲ呈シ且ツ潤濁肥厚シ光澤ヲ缺ク、穿孔ヲ通ジ中耳粘膜炎ヲ伺フニ輕度ノ充血ヲ認ム。參考トシテ左ニ鼓膜ノ穿孔部位ヲ示ス。大正八年〇月〇日ノ狀態ナリ。

右耳ニ於テ耳翼及ビ其附近皮膚ニ何等ノ異狀ヲ認メズ、外聽道内ニハ僅少ノ耳聾栓塞ヲ容ル、鼓膜ハ一般ニ生理的彎曲面ヲナサズ從ツテ

光錐ヲ缺キ濁滯肥厚シ光澤ヲ失フ、槌骨短突起ヨリ上方ニ癰脹ヲ有セリ。

尙參考トシテ左右兩側鼓膜ノ打撲ヲ受ケシ日ヨリ四日目即チ大正八年〇月〇日ノ狀態ニ就テ〇醫師

ノ診斷書ニヨリテ其内主要ナル所見ヲ記載スレバ次ノ如シ。

患者ノ訴フル所ハ唯耳ノ異常ノミ、左側耳中ヲ診スルニハ外聽道ニハ異常アラザルモ鼓膜ハ下後半部

ニ於テ出血粘着セルヲ認メ其他ノ部モ少シク充血濁滯シ聽力ハ普通ノ半バヲ失ヘルガ如シ。

右鼓膜ハ穿孔ニ至ラザルモ輕少ノ裂傷ヲ生ジタルモノニシテ損傷後二週間モ經過セバ聽力ノ回復ヲ

得ルニ至ルモノト診斷ス。

聽力検査

一、兩側耳ヲ開放セル場合即チ何等ノ處置ヲ施サザル場合。

高聲音ヲ以テ檢スル場合及ビ普通談話語ヲ以テ檢シタル場合ニ於テモ何等ノ苦痛ナクヨク聽取スル事ヲ得タリ、但シ多少頭部ヲ左方ニ傾

ケテ右耳ニテ聽取スル如キ狀態アリ。

二、脱脂綿ヲ水ニ浸シ是ヲ以テ右側外聽道ヲ全ク閉塞シ左耳即チ毆打セラレタル耳ノ外聽道ノ軸ニ一致セル位置ノ長距離ヨリ漸次耳ニ近ツ

キテ高聲音、普通談話語及ビ呟語ヲ以テ檢ス、成績次ノ如シ。

(イ) 高聲音ヲ以テ檢セシ場合、約二メートルノ距離ニ於テ聽取シ得。

(ロ) 普通談話語ヲ以テ檢セシ場合、約二尺ノ距離ニ於テ聽取シ得。

(ハ) 呟語ヲ以テ檢セシ場合、耳前ニ於テ精確ニ聽取スル事ヲ得ズ。

三、左耳ヲ前同様ニ閉塞シテ右耳ノ聽力ヲ檢セシ場合

(イ) 高聲音及ビ普通談話語ヲ以テ檢セシ場合、約二メートルノ距離ニ於テヨク聽取シ得。

(ロ) 呟語ヲ以テ檢セシ場合、約二メートルノ距離ヨリヨク聽取スル事ヲ得。

音叉試驗

一定ノ高調音或ハ低調音ヲ發スル器械即チ音叉ヲ以テ檢シタルモノニシテ、其成績ハ聽力尋常ナル者(此場合自身ノ耳ヲ用フ)ニ比較シテ「バーセント」ニテ示セリ。

左耳ノ聴力（註健康耳ノ聽力ヲ百ト假定ス）

リンネ氏試験法 陰性
骨傳導検査 殆んど尋常
ウェーベル氏試験法 右偏

右耳ノ聴力

リンネ氏試験法 陰性
骨傳導試験法 稍々延長

迷路機能検査

一、左耳ニ攝氏六度ノ冷水ヲ注入ス、二分間ノ後著明ニ水平位ニシテ且ツ右方ニ強ク眼球震盪ヲ起シ三分十五秒持續ス。

其直後同ジク攝氏四十度ノ温水ヲ左耳ニ注入セシニ何等ノ症狀ヲモ起サザリキ。

大正八年〇月〇日再び検査ヲ行フ、成績上圖ノ如シ。

迷路機能検査

左耳又叉検査成績

左耳ニ攝氏五十一度ノ温水ヲ注入ス、一分五秒ノ後著明ニ水平位ニシテ且ツ左方ニ強ク眼球震盪ヲ起シ一分三十秒持續ス。

「ゴニオメーテル」検査

開眼時					閉眼時				
足尖舉上	右足降下	右足降下	右足降下	右足降下	足尖舉上	右足降下	右足降下	右足降下	右足降下
一五度	一七度	一二度	一九度		一八度	二四度	一三度	二一度	

以上ノ成績ニ依リテ鑑定スル事次ノ如シ。

一、M〇H〇ノ左耳鼓膜ニ穿孔アリ。

二、此穿孔ハ目下ノ狀態ニ於テハ外傷ニ因セシ裂傷ト認ムルヲ得ズ、却ツテ慢性化膿性中耳炎ニ依ツテ起リシ病的穿孔ト認メラル、而シテ其化膿性中耳炎ガ裂傷ニ原因セシヤハ全ク不明ナリ。

三、該穿孔ノ起リシ時日ノ鑑定ハ不可能ナルモ恐ラク數ヶ月前ニ起リシモノナラント推定ス。

四、其穿孔ハ治癒ス可キヤ否ヤ不明ナリ。

說 明

一、M〇H〇ノ左耳鼓膜ニ穿孔アリト鑑定シタルハ余ガ大正八年〇月〇日縣立熊本病院耳鼻喉科診察室ニ於テ左ノ所見ヲ得タルニ依ル、即チ左耳鼓膜ノ前上部即チ槌骨柄ニ沿ヒ少シク前方ニ於テ卵圓形ノ穿孔アルヲ認メシヲ以テナリ。

二、此穿孔ハ口下ノ狀態ニ於テハ全ク中耳炎ニ依リテ起リシ病的穿孔ナリ、而シテ其穿孔ガ如何ナル機轉ニ原因セシヤハ不明ナリト鑑定シタル理由ハ次ノ如シ。

凡ソ鼓膜ノ裂傷ハ穿孔トハ全然其ノ意味ヲ異ニス、穿孔トハ炎症ニ因スル鼓膜ノ物質缺損ヲ稱スルモノニシテ、外傷ニ起因セルモノヲ裂傷又ハ外傷性穿孔ト稱ス、此意味ニ於テ明カニ穿孔ナル現象ハ病的ニシテ裂傷ハ非病的即チ或ル外力ノ鼓膜ニ加ハリテ起リタルモノナル事ヲ知ルニ足ル可シ、而シテ之等兩者ヲ鑑別スルニハ其部位、形狀、物質缺損ノ有無、穿孔縁及ビ其周圍ノ性狀及ビ中耳粘膜ノ性質等ヲ考慮セザル可カラズ。次ニ參考ノ爲メ介達の外傷(例之外耳打撲ノ如キ)ニ因スル鼓膜穿孔ノ特徴トモ稱ス可キ點ヲ列記セバ

一、部位ハ前下部又ハ後下部ニ多シ。

二、形狀ハ細長ニシテ紡錘狀或ハ罈狀ヲ呈シ且ツ殆ンド常ニ放射狀ニ走行ス即チ裂傷ノ方向ハ一端ハ鼓膜ノ中心ニ他端ハ周縁ニ向フモノナリ。

三、物質缺損ナシ。

四、邊緣銳利ニシテ凝血ヲ附着ス尙其附近ニモ皮下溢血ノ存スル事アリ。

五、中耳粘膜ハ骨樣黃色ニシテ腫脹發赤等ナシ。

翻ツテM〇H〇ガ現在ニ於ケル鼓膜穿孔ノ狀態ヲ見ルニ其部位ハ鼓膜前上部ニ存シ形狀卵圓形ナリ、而シテ物質缺損ヲ有ス、穿孔縁ハ鈍ニシテ圓味ヲ有シ多少肥厚セル狀態ニアリ而シテ其附近ニ於テ凝血溢血等ノ存スル事ナシ且ツ其穿孔ヨリハ粘液樣膿汁ヲ排出ス、精細ニ中

耳粘膜ノ狀態ヲ檢スル事能ハザルモ余ノ窺ヒ得タル範圍ニ於テハ多少發赤セリ、之ニ依ツテ是ヲ考フルニM○H○ノ左耳鼓膜穿孔現在ノ狀態ハ一ツモ外傷性穿孔ノ特有點ニ該當スル條件ナク、反ツテ病的穿孔ニ一致スル點多シ、故ニ之ヲ以テ決シテ外傷性穿孔即チ裂傷ト見做ス事能ハズシテ中耳炎ノ存在ニヨリテ起リタル病的穿孔ナリトスルヲ至當トス、之レ病的穿孔ナリト鑑定シタル理由ナリ。

然レドモ以上述べシ外傷性穿孔ノ特徵トモス可キ所見ハ其新鮮ナル時期即チ外傷ヲ受ケシ直後或ハ短時期ノ間ニ於テ認め得可キモノニシテ、決シテ永久ニカ、ル狀態ヲ殘在スルモノニ非ズ時日ノ經過ニ伴フテ其裂傷ハ大體次ノ如キ變化ヲ取ルモノナリ。

一、裂傷ヲ起セシ當時ノ出血ハ漸次吸收セラレ裂傷縁ヨリハ上皮形成ヲ起シ遂ニ全ク裂傷ハ閉塞セラレ鼓膜ハ瘢痕形成ヲ以テ治癒ス可シ若シ裂傷非常ニ大ナル場合ハ或ハ全ク閉塞セラレズシテ一定ノ大サニ裂傷孔ヲ殘シテ治スル事アリ。

二、裂傷ヲ受ケタル際或ハ其後ニ於テ化膿性細菌ノ二次的傳染ヲ受ケテ化膿性中耳炎ヲ發シ、爲メニ中耳ヨリ膿汁ヲ分泌シ裂傷孔ヲ通ジテ外聽道内ニ排泄スルニ至ル、從ツテ裂傷孔ハ膿汁ノ爲メニ上皮形成ヲ妨ガラレテ全ク閉塞スル事ナク漸次其形狀ヲ變ジ後ニ至リテハ恰カモ病的穿孔ノ如ク所謂穿孔性中耳炎ノ形ヲ以テ殘ル事アリ。

外傷性鼓膜穿孔ニ際シ、若シ後者ノ如キ經過ヲ取リタル場合ニ於テ或ハ一定ノ時日ヲ經過シタル時期ニ之ヲ見レバ、其穿孔ノ形狀及ビ邊緣ノ性質等外傷性穿孔ニ特徴トス可キ狀態ハ漸次消失シテ遂ニ全ク病的穿孔ト鑑別スル事能ハザルニ至ルモノナリ、故ニ今穿孔性中耳炎ノ發生原因ヲ診定スルニ當リ、初メ中耳炎ヲ發シテ次ニ鼓膜ノ穿孔ヲ起シタルモノナルヤ、或ハ外傷性穿孔ヲ起シ二次的細菌ノ感染ニヨリ中耳炎ヲ發シ時日ノ經過ト共ニ現在ノ狀態ヲ呈スルニ至リタルヤ、或ハ外傷ヲ受ケタル以前既ニ鼓膜ニ穿孔シヤスキ性狀ヲ有シ居リタルヤ全ク不明ナリト云ハザル可カラズ。

依ツテM○H○ガ鼓膜穿孔ヲ起セシ原因ヲ考フルニ、目下全ク病的穿孔ノ狀態ヲ呈シ且ツM○H○ガ廿五歲頃左右耳疾病ニ罹リ其後難聴ヲ殘セル既往症アレドモ、之ヲ以テ直チニ其以前ヨリ中耳炎性穿孔アリシモノト斷定スル事能ハザルト同様、又大正八年○月○日左耳ヲ殴打セラレタル事實アリト雖モ、既ニ受傷後約八十二日間ヲ經過セル今日ヨリ該穿孔ハ必ズシモ外傷ニヨリテ起リタル二次的現象ナリト斷言スル事ヲ得ザルヤ論ヲ俟タズ、之余ガ穿孔ヲ起ス以前ニ如何ナル機轉ノ存在セシヤ不明ナリト鑑定シタル理由ナリ。

尙左側内耳ノ機能検査ニヨリ内耳ハ左程ノ障礙ナキヲ確定セリ故ニM○H○ノ左耳ハ中耳ノ疾病ニ止マルモノナリ。

三、該穿孔ノ起リシ時日ノ鑑定不可能ナルモ恐ラク數ヶ月以前ニ起リシモノナラント推定スト鑑定シタルハ鼓膜穿孔縁ノ肥厚セル事、一般鼓膜ノ潤濁シタル事及ビ鼓膜ガ生理的彎曲面ヲナサザル事等ノ條件ヨリシタルモノニシテ正ニ炎症症狀ガ鼓膜ニ一定ノ時日間經過シタル

場合ノ狀態ニ一致ス。而シテ余ガ日常經驗ニ依ルニ此ノ如キ狀態ハ多クノ場合大約數ヶ月以上經過セルヲ以テナリ。

四、其穿孔ハ治癒ス可キヤ否ヤ不明ト鑑定シタル理由、目下ノ狀態ニ於テ穿孔ノ治癒ハ現存ニル中耳炎ノ治癒如何ニ關係スルモノニシテ中耳炎ガ長ク繼續セル場合ハ其穿孔ハ益々大トナリ遂ニ治癒スルニ至ラズ、然ルニ中耳炎ガ適當ナル治療ノ下ニ比較的早く治癒セシ時ハ尙穿孔ハ左程大ナラザルガ故ニ穿孔縁ヨリ鼓膜ノ再生又ハ癰痕形成ヲ來タシ治癒スル可能ヲ有ス。

本鑑定ニ要セシ日數ハ大正八年○月○日ヨリ同年○月○日ニ至ル十八日間トス。

右鑑定候也

大正八年○月○日